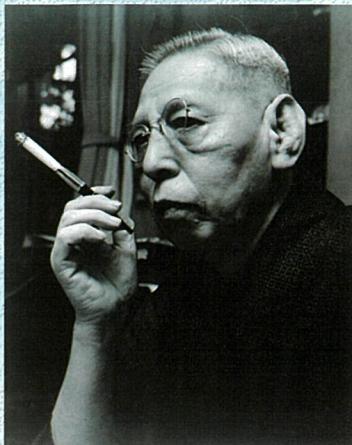


空青し山青し海青し

—佐藤春夫、文学と熊野と—



佐藤春夫 (1892~1964)

1892年(明治25)和歌山県東牟婁郡新宮町(現・新宮市)生まれ。1910年(明治43)、和歌山県立新宮中学校を卒業と同時に上京。慶應義塾大学予科文学部に入学(のちに中退)。雑誌「三田文学」「スバル」などに詩歌を発表、1918年(大正7年)、谷崎潤一郎の推挙で文壇に登場。以来『田園の憂鬱』『お絹とその兄弟』『美しき町』などの作品を次々に発表して新進流行作家となり、芥川龍之介と並んで時代を担う2大作家と目されるようになった。その著作は多様多彩で、詩歌、小説、紀行文、戯曲、評伝、自伝、研究、隨筆、評論、童話、民話取材のもの、翻案などあらゆるジャンルにわたり、わが国の近代文学に大きな足跡を残し、文化勲章にも輝いた。また、ふるさとをこよなく愛し“望郷詩人”ともよばれた。

空青し山青し海青し
椿の葉焦げて落ちたり
古の帝王たちも通はせし
尾の上の道は果てを無み
ただつれづれに
通ふべきはにあらねば
目を上げてただに望みて

塵まみれる街路樹に
哀れなる五月来にけり
石だたみ都大路を歩みつつ
恋しきや何ぞわが古郷
あさまよし紀の国
牟婁の海山

夏みかんたわわに実り
橘の花さくなべに
とよもして啼くほどとぎす
心してな散らしそかのよき花を
朝霧か若かりし日の
わが夢ぞ

そこに狭霧らふ
朝雲か望郷の
わが心こそ

そこにいさよふ
空青し山青し海青し
日はかがやかに

南国の五月晴こそゆたかなれ
心も軽くうれしきに
海の原見廻かさんと
のぼり行く山辺の道は
杉檜樟の芽吹きの
花よりもいみじく匂ひ
かぐはしき木の香薫じて
のぼり行く路いくまがり
しづかにも昇る煙の
見まがふや香炉の煙
山樵が吸ひのこしたる
鄙ぶりの山の煙草の



春夫の「少年の日」に詠まれた王子ヶ浜風景（新宮市）

塵まみれる街路樹に
哀れなる五月来にけり
石だたみ都大路を歩みつつ
恋しきや何ぞわが古郷
あさまよし紀の国
牟婁の海山

夏みかんたわわに実り
橘の花さくなべに
とよもして啼くほどとぎす
心してな散らしそかのよき花を
朝霧か若かりし日の
わが夢ぞ

そこに狭霧らふ
朝雲か望郷の
わが心こそ

そこにいさよふ
空青し山青し海青し
日はかがやかに

いそのかみふるき昔をしのびつ
そぞろにも山を下りぬ
歌まくらはなれ小島に
立ち騒ぐ波もや見むと
辿り行く荒磯石原
丹塗舟影濃きあたり
若者の憩へるあらば
海の幸鯨捕る船の話も聞くべかり
且つは聞け
浦の浜木綿幾重なすあたり何處ど
いざさらば
心ゆく今日のかたみに
荒海の八重の潮路を運ばれて
流れよる千種百種
貝がらの数を集めて歌にそへ
贈らばや都の子等に

(昭和6年6月「婦人公論」発表)

熊野への誘い

春夫の文章を通して、
熊野地方の風景を紹介します

熊野

わが郷土の海と山との構成する風光の美はさすがに天下に誇るに足るもので、山中に海辺に景観は行く先々に自ら人を迎える境地は歩々に千变万化してわずらわしく目まぐるしいと志賀直哉をして言わしめた程に人を飽かしめないものを蔵している。

名山にあって飛泉の高く人目をさわやかにするもの、名邑の思いがけなく現われて人を驚かすもの、アメリカ大陸の遠く杳雲の水平線上に見出されるかを疑うような雄渾な展望、さては自然の内懐に抱かれるかのような幽境のなつかしいもの、その間、透明な浴泉のあるいは山ふところに、あるいは海島に、あるいは河畔にわき出でて俗塵を洗って人のハダに快いものなど数え尽し難い。

(昭和32年「観光和歌山県」より)

滝峠

(国特別名勝天然記念物「滝八丁」/三重県・奈良県・和歌山県)

滝は熊野川を奥深く遡って人里の遠い山間の物音のない世界であった。…(略)…岸の川原で小石を拾つて遊覧に漕ぎ出した小舟の舷からそれを落してみると、小石はゆらゆらと水をわけて沈んで行つて川底に落ち着くとたんに川床の石と触れ合つて水の下からひびいて来た音が幽かにわが耳にとどいたのと、その小石が水に沈んで行く、途中流のなかにゆらめいて波紋のやうなものが水中の光を乱したのとを、子供ごころに楽しくおもしろいものに見たのをおぼえてゐる。

(昭和33年「日本の風景—熊野アルバム」より)



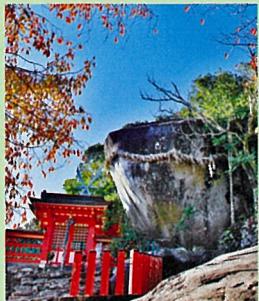
熊野速玉大社 (世界遺産／和歌山県新宮市)

速玉神社は…(略)…いはゆる新宮の由緒の正しい古い大社で、それも木の国に鎮座しますだけに平の重盛が植ゑたと伝はる大きな神樹の竹柏のやうなのは格別としても、神苑には樹木は四十年前、今日よりももつと数が多く茂つてゐたやうな気がする。子供心にさう感じたのかも知れない。蒼蒼たる老杉の梢に明けてゆく朝靄の間に鴉が思ひ出したやうにばつばつと飛び出して河原の方へ行くのが見られる。

(昭和13年「御代の春」より)



おとうまつり
御燈祭



ゴトビキ岩

お灯まつり (国重要無形民俗文化財／和歌山県新宮市)

新宮のすぐ背後、西にそびえる千穂が峰の最南端が神の倉と呼ばれる岩石の露出した部分であるが、そこにゴトビキ岩というがまがえるのうづくまつた形の高さ二丈ばかりのすばらしい巨巖があり、その下に高倉下命を祭ったという小祠がある。

…(略)…毎年二月六日(土地ではこの日を寒さの絶頂としている)夕刻からまず新宮川の川口に近い飛鳥神社にお参りして、その裏手の川原でみそぎをしました後に神の倉に向うのである。…(略)…神の倉では鎌倉時代といわれる石段五百段の急坂の中ほどにある中の地蔵という広場に一たん集合して、ここではじめて火をもらって、たいまつにつけ、これをかざし先を争って駆け下りる行事がこの祭りである。

(昭和36年「かけあがるたいまつ 新宮のお灯祭り」より)



那智の滝 (世界遺産／和歌山県那智勝浦町)

巨きさといふ点では、那智は決して大したものではあるまい、すくなくも華麗などの敵ではない。しかし形のすなほに美しいといふ点では、天下無類と号して、山は富士、滝は那智といつても必ずしもお国自慢と笑はれまい。古人がおののこれを御神体にして拝したのも無理ではない。それほど端麗優美である。誰やらがこれを詠じた五言の結句に、春山眉月斜とあつたがなるほど春山、眉月などがふさわしく、聯想されるものである。

橋南谿が南遊記に美人の羅衣を纏ひて立てるが如しといつたのも、一片の麗句ではなく神を伝へ得てゐる。水音のひびくあたりに目をあげて望むと一直線にすんなりと、背すぢゆるやかにうねつて落ちる線を美人の立ち姿と見よう、折から風が来て飛沫の吹きなびくさまが羅衣に似てゐる。

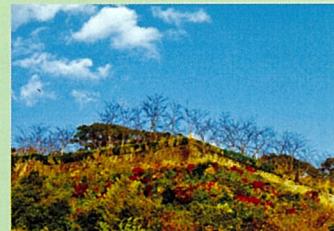
(昭和13年「那智の滝」より)

丹鶴城址 (国史跡「新宮城跡」／和歌山県新宮市)

わたくしの故郷、熊野の地は日本でも雨量の最も多い地方といふ事になつてゐるので、四季とも雨が多く、なま温い春雨のつづく日から、やがて五月雨に入り、さて雷鳴をともなふスコオルのやうな白雨から秋霖などさまざまな雨にならやまされるなかで、颶風一過の後の日本晴れは最もうれしいものであつた。

秋風や時に古城に登る人などとなまいきにませた人真似を口ずさみながら町の丹鶴城址などに散歩するのもかういふ秋晴れの日であつた。

(昭和30年「白雲再去来 日本晴れを想ふ」より)



太地・樅取岬 (和歌山県太地町)

太地町は勝浦町と下里町との中間に位してゐる。…(略)…潮の岬のつぎに、熊野でも最も南方に突出したのが樅取岬で黒潮に近く温暖の地とされてゐるのが太地町である。道は曲折した起伏しながら次第にのぼる。木の間に椿の咲いてゐるのをどころどころに見る。さまざまに案じた末に

海近き道の起伏や寒椿といふ一句を得た。…(略)…この地には水仙があたりをかぐはしくするほど咲きみだれて寒さなどはどこ吹く風と春光のみなぎる中に正月の休暇を利用しての仲よし同士の遠足らしい高校の女学生らしいのが四五人、波の穂の時々白くひるがへる海を背景に冬も枯れない草原に寝ころんでゐた。

(昭和36年「望郷の賦」より)

新宮市立佐藤春夫記念館

東京の文京区関口町にあった佐藤春夫邸を故郷の新宮市に移築して記念館として公開しています。



外観



応接間



サンルーム

住所

和歌山県新宮市新宮1番地
(熊野速玉大社境内)

TEL 0735-21-1755

<http://www.rifnet.or.jp/~haruokan/>

熊野学研究委員会は昭和57年に発足し、熊野地域の自然・歴史等について研究を続けています

<問合先> 新宮市教育委員会文化振興課 TEL 0735-23-3333